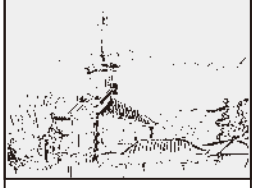
城北



平成31年3月1日現在

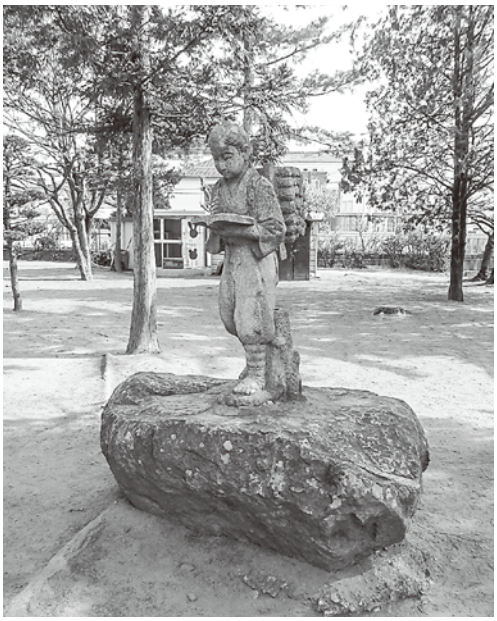
総世帯数	3,641
総人口	7,816
男	3,704
女	4,112

城北の石碑

二宮金次郎像

開智小学校南側の木立の中に、薪を背負った二宮金次郎の像があります。

この像は、80年前の昭和14年（1939）に大寫良七さんから旧田町小学校に寄贈されたものですが、昭和38年に田町小学校と開智小学校が統合されたことから現在の場所に移されました。



金次郎の生涯

金次郎は天明7年（1787）に現在の小田原市の裕福な農家に生まれましたが、近くを流れる川の氾濫で家や田畑など全財産を失うとともに13才の時に父親を亡くし、一家の大黒柱として朝は早起きして山で薪を取り、夜なべには草鞋を作って一家4人の生計を支えました。しかし、15才の時に母親が亡くなり、金次郎は弟2人を母の実家に預け、自身は伯父の家に身を寄せることになりました。

伯父の家では農業に励み、身を粉にして働きましたが、この伯父が人一倍ケチで金次郎が夜に読書をすると「燈油の無駄遣いだ」と罵られたと言うことです。

伯父の家を出た金次郎は、親戚や親族の家を転々とした後20才の時に生家に戻り、家を修復したり質入れした田畑を買い戻したりしました。

そして、田畑の一部を小作に出す一方小田原藩の家老家の財政立て直しの依頼を受け、五年後には千両の負債を返すとともに300両の余剰金を出すまでになりました。この成功に寄って金次郎の名前が小田原藩内に一気に広まり、財政立て直しの依頼が舞い込むようになりました。

金次郎が財政の立て直しの基本とした考えは、至誠・勤労・分度・推譲で、目標に向かって小さなことを怠らない、収入と支出に見合った生活をする、余剰分を困窮者に分け与えることだと説いています。

こうして金次郎は小田原藩内だけではなく下野（栃木県）、常陸（茨城県）、駿河（静岡県）などの600カ所あまりで武家の財政を立て直すとともに農村の復興にも尽しました。

天保13年（1842）には幕吏に登用され、此の頃から「尊徳」の名称を使うようになりました。その後日光などで仕事に従事しましたが、安政3年（1856）下野・今市村（現在の日光市）で69才で没しました。

金次郎像の変遷

柴刈り縄ない草鞋を作り
親の手を助け弟を世話し
兄弟仲良く孝行尽くす
手本は二宮金次郎

これは、明治44年（1911）に作られた小学唱歌の一節ですが、薪を背負って本を読んで歩く姿の記述は、明治14年（1881）の「報徳記」（富田高慶＝尊徳の娘婿）が初見で、続いて明治24年（1891）の文豪・幸田露伴の「二宮尊徳翁」に挿絵として金次郎像が使われました。また、「報徳記」を読まれた明治天皇が県知事などに配布したことによって、金次郎の名と業績が全国に広められました。しかし、金次郎が教科書で取り上げられるようになったのは、明治37年（1904）の尋常小学校修身書からで小学唱歌にあるように「孝行・勤勉・学問・自営」の四つの徳目を教えることになっていました。

一方、小学校に金次郎像が建てられた最も古いものは大正13年（1924）に現在の愛知県豊橋市立前芝小学校で、以後昭和天皇の即位式があった昭和3年（1928）から約10年の間に全国の小学校で金次郎像を建てることが一種の流行になった、と言うことです。

太平洋戦争中は、金属回収のために、また戦後は老朽化や校舎の建て替えのために、或いは「児童の教育方針にそぐわない」「戦前教育の名残り」のほかに「あるきスマホを助長させる」などの理由で撤去されたりしていますが、平成28年（2016）に日光市立南原小学校に寄贈された金次郎像は、時代を反映して座像になっています。

金次郎の考えや行いはAI時代と言え損得にとらわれない現在に通じるものがあるようです。

なお、現在全国の小学校には1003体（長野県は6体）の金次郎像がありますが、76％はコンクリート製です。

三従ばかりでは無かった
『江戸時代の女性たち』

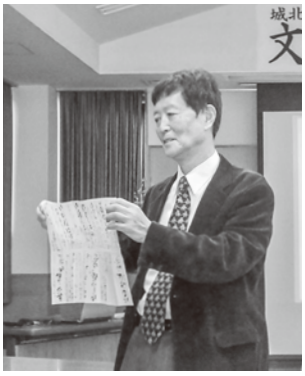
2月22日、文化部主催の「歴史講座」が後藤芳孝講師（田町在住）の解説でおこなわれました。人気の講座とあって2階ホールの聴衆約40人が、興味あるお話に肯いたり笑ったり、あっと言う間のひと時を過ごしました。

家庭内の事情は主に、女性解放運動で有名な**山川菊枝**の本から紹介されました。水戸藩下級武家生まれの母親に聞いた近親女性者達の日々は、個性的な様ざまな姿を描いて、昔も今も変わらぬ人間像が浮かび上がってきました。

また、家事一切と家計のやり繰りは、女性の腕の見せ所とあって、働き者の内助で家が成立っていたことが、教育や家事・身だしなみなどの躾けから窺えました。

下町のおかみさんや機織り職人から深窓の妻女や農民から遊女にいたるまで階層の異なる女性達を、活き活きと描いた沢山の絵草子や浮世絵でみることができました。

また服装と髪型は、身分・貧富・年齢・地域によって異なりますが、江戸時代を通じ政治や経済の影響を受けた時々の流行で、様々に変化をみせました。特に衣装は文化遺産として現代にも大きな影響を残しています。



終わりに講師は「**三従の教えに従うばかりでは無かった、女性達の生き様**が浮かび上がることが出来たら」と結ばれました。

二つの料理教室

2月18日には城北公民館で、2月20日には蟻ケ崎の児童館でそれぞれ料理教室が開かれました。

公民館の料理教室では、男性2人を含む18人が参加し「太巻き寿司」の作り方を習いました。

「太巻き寿司」は、白とピンクに色付けしたすし飯や薄焼き卵などを金太郎飴を作る要領で重ね、海苔で包んで出来上がりですが、薄焼き卵は途中で切れたり上側がうまく焼けなかったりして苦労していました。ようやく出来上がった、切り口はなかなか見事な「薔薇の花」になっていました。

参加した人たちは、作ったばかりの「太巻き寿司」をほおばり、料理の苦労を感じていました。

一方児童館ではボランティアの助けを借りながら40人の子どもたちが「やしょうま」作りを体験しました。

お釈迦さまの弟子の「ヤショ」が差し上げた団子がお釈迦様の気に入り「ヤショ、うまかった」と言ったことが起源という説がありますが、当時お釈迦様が日本語を話せたかどうかは不明です。

「やしょうま」は米粉に砂糖や塩を入れて熱湯でこね、蒸して上で紅や黄色に色づけし、10センチほどの細長い棒のような形にして「太巻き寿司」と同じ要領でまとめ、海苔の代わりの薄く伸ばした緑の蒸粉で包みます。

更に全体を30センチほどに引き伸ばして出来上がりです。切り口は鮮やかな「梅の花」のようで、子どもたちは「おーォ」と感嘆の声をあげていました。

城北地区冬の行事